

望月由起著

『現代日本の私立小学校受験』

(学術出版会 2011年)

小針 誠 (同志社女子大学)

評者が国立・私立小学校受験の研究を開始した1990年代末頃、史資料の不足から幾度となく挫折の危機に見舞われたことがあった。それは本書『現代日本の私立小学校受験』で著者自身も述べているように、各学校が受験者数や入学者等の基本的な情報を非公開にしていることが多いからである。したがって、ほとんど信頼に足る史資料やデータを揃えることができず、受験用の図書や雑誌などの情報源に依拠せざるを得なかった。そのような過去を背負う身からすれば、ヴェールに包まれた現代の私立小学校または小学校受験の実情を明らかにし、単著として刊行した意義は非常に大きいと評価したい。

本書の内容は大きく二つにわかれ、前半の第1～3章は学校基本調査や受験雑誌など各種資料から「私立小学校の実像」を、後半の第4～6章は「私立小学校受験の実態」として保護者を対象とした質問紙調査の計量分析と自由回答という、文字通り質量両面からアプローチしている。とりわけ本書における最大の功績は、やはり最新のデータの分析結果を盛り込んだことであろう。なかでも、小学校受験家庭／一般家庭の双方を調査対象にしている点はかつて評者自身が成し得なかった成果である。また、私立小学校の相次ぐ設置が進む関西圏なども研究対象に含め、私立小学校受験の実態を様々な角度から明らかにしつつ、質的データを含めてその実相に迫ろうとしている点など、その試みや意欲については高く評価すべきものであり、興味深く拝読した。

そのうえで本書の内容に関して、以下に挙げる印象をもった。

第一に、先行研究として挙げられた評者からのリプライということになるだろうか、著者が先行研究として評者の研究を取り上げて批判的検討を加え、そのうえで執筆・刊行した本書の内容に対する評者自身の率直な評価である。著者は、評者の研究(小針2000,2002,2004)を指して曰く「首都圏という限られた地域に限定した10年前ほど前の調査に基づくものである。その調査期間以降も、私立小学校を取り巻く環境は大きく変化しており、私立小学校受験・進学に対する家庭の新たな教育戦略を捉えていくことが必要である」(18頁)。

著者による先行研究の批判は概ね正鵠を得た内容である。著者自身もまた本書において最新の学校基本調査(文部科学省)や2008年・09年の質問紙調査のデータを用いた分析結果から変化を明らかにしようと試みている。しかし、質問紙調査の分析を通じて、子どもの家庭環境(保護者の社会階層など)や志望理由・教育戦略・教育意識に関して、この10年間で変わったこと／変わらなかったことはいったい何であったのだろうか。すでに刊行されている先行研究のデータとの対比から時系列的な比較を通じて、「変化」を読み取ろうとする積極的な試みがあってもよかっただろう。また、首都圏以外の地域として関西圏を加えたことは調査設計上オリジナルであったとしても、その地域的な相違については一部で分析・紹介されているに過ぎず、十分に明らかにされているわけではない。その一部についても地域間の異

同を明らかにする理由や仮説がないため、やや唐突な印象を与えている。評者は、首都圏と関西圏とでは私立小学校の位置づけや小学校受験に対する関わり方・評価あるいは子どもの家庭環境も異なるように感じているが、地域間の比較を試みることで、より多くの興味深い知見を発見できたのではないだろうか。関西圏も含めた最新の調査データの分析に基づいていることを、本書のデータ上のオリジナリティとして謳っているにもかかわらず、それらが十分に明らかにされておらず、誠に残念におもわれた。

第二に、本書における質問紙調査の分析結果の多くが単純集計による図表の提示とその説明だけに終止してしまっている点も同様に残念なところであった。質問紙調査を実施し、そのデータを統計ソフトにかければ、何らかの数字は出てこよう。また、単純集計の結果であっても、それなりの知見や意義を見出すことは可能であるかもしれない。しかし、本書においては、それぞれの図表に対する説明以上に、数字の「意味」を詳しく説明している箇所が実はそれほど多くはない。つまり、図表を一瞥すれば、そこに付された説明文を読む必要がほとんどなくなってしまうのである。たとえば、第4章では、小学校受験家庭の特徴を示す単純集計の結果が円グラフとともに提示されているが、それに付されている説明の多くはその傾向を述べるに止まっている。著者は小学校受験家庭と一般家庭の両方を対象に調査をしているのだから、その利を活かし、両者の比較を試みつつ、それを図表などの形で示せば、小学校受験家庭の特質がさらに際立った形で明らかになっただろうし、さらに著者自身が「なぜ異なるのか」という問いに理論的な回答を提示していれば、著者自身の見解やスタンス、ひいては本書のオリジナリティがより際立ったのではないだろうか。自由回答についても、回答者が記入した内容をただ提示している箇所が目立ち、それらについての分析が行われているわけでもない。先に述べたことと同様、苦心して蒐集したに違いないデータが十分に活かしきれていないようにおもわれ、その点で大変勿体ない気がした。

第三に、研究者のみならず、一般の読者を対象としている本書において「実証的であること」や「調査データ」はいかなる意味をもつのだろうか。著者は本書の「まえがき」において、多様な読者層を想定したうえで、「小学校受験や早期選抜問題、ひいては現代日本の教育選抜といった問題について、共に考えていただければ幸いである」(4頁)と呼びかける。事実や実態という名のもとに明らかにされたデータの数々あるいは教育社会学的知に溢れる本書の内容を、小学校受験家庭を含む一般の読者はどのように捉え考えるのだろうか、そもそも何を考えるべきなのだろうか。

本書評を締めくくるにあたって、評者は、一般書としての本書の成果や意義を認めつつも、今後、著者には質問紙調査等で得られたデータの再分析等を通して、理論・仮説・実証を十分に備えた「学術論文」として認める研究成果を発表して頂きたいと願わずにはいられない。